デジタル人材に必要なコンピテンシーの探索的検討

森口雅之（もりぐち　まさゆき）
東京都立産業技術大学院大学

1. はじめに

この度は，学生優秀発表賞に選出いただきありがとうございます．全国研究発表大会では参加者との意見交換を通じて，貴重な示唆を得ることができました．

このような機会を提供してくださった経営情報学会 2024 年全国研究発表大会運営委員の皆様，本研究を指導してくださった三好先生，インタビュー調査にご協力いただいた皆様，発表への助言をいただいた PBL（Project Based Learning）チームのメンバー，今回の発表に対して貴重なアドバイスやフィードバックをくださった全ての皆様に，この場を借りて深く御礼申し上げます．

2. 研究概要

企業等でのデジタル・トランスフォーメーション（DX）の取組みは年々増加傾向にあり，着実に企業に浸透してきています．また，デジタル技術によって既存の価値観や枠組みを根底から覆すような革新的なイノベーションをもたらすことが期待されています．

しかし，DX を推進する人材は，量と質の両面で，「大幅に不足している」状態が改善されていません．また，DX 推進においては，高度なデジタル技術を活用できるスキルを持つ技術系人材のみならず，ビジネスやサービス設計，組織やプロジェクト管理など，ビジネス系のスキルを持つ人材も必要です．

特に，事業会社においては，これまでのように外部のベンダー企業に任せるのではなく，自ら人材を確保するべきと指摘されています．デジタル人材確保の課題の一つとして，人材像や評価基準が明確になっていない企業は多いです．

企業はデジタル人材のスキル・コンピテンシーについて，IT スキル標準 V3（IPA, 2011），i コンピテンシーディクショナリ（IPA, 2014）を拠り所にしてきました．最近では，デジタルスキル標準（IPA, 2024）が公開されています．しかしながら，これらは最終的に習得すべき能力の類型化や熟達者の持つ能力を明らかにすることを主目的としています．獲得プロセスや評価手法などにも言及はあるものの，ドキュメントの特性上，それらは汎用的なものとなっています．

これまでに，デジタル人材に必要なコンピテンシーについて，少人数を対象とした予備調査，事業会社のデジタル人材を対象とした検討，SI 企業（システムインテグレータ）のデジタル人材を対象とした検討を行ってきました．本研究は，これらの調査研究結果をもとに，事業会社と SI 企業のデジタル人材に必要なコンピテンシーについて明らかにすることを目的に，調査・分析を行いました．

3. 現在の研究状況と今後の研究計画

今回の発表では，現状の問題や関連研究を整理し，事業会社，SI 企業に所属する技術者 29 名へのインタビューを行い，質的統合法（山浦，2012）による分析結果を報告しました．分析の結果，事業会社のデジタル人材のコンピテンシーの向上プロセスとして，「職務でもどかしさがあっても仲間に支えられ前向きに取組み，自ら主体性を発揮しながら完遂する．そして，会社評価だけでなく，自己実現と自分の市場価値を高めるために行動する」ことが示されました．一方で，SI 企業のデジタル人材のコンピテンシーの向上プロセスとして，「評価機能の不全と顧客へのもどかしい思いを抱えつつも，経験や環境からの刺激を受けて，学びを体系化し，転職や高い視座という成果を得る」ことが示されました．

事業会社においては，事業会社ならではの変革への挑戦機会と，それが社内の収益や業務効率に反映されることにより，評価や信頼を得る学びの場とな

図 1　発表風景

る特徴が確認できました．一方で SI 企業においては，さまざまな案件での経験ができる SI 企業の醍醐味であり，SI 企業の評価においては，重要となる指標は売上と利益でした．これは顧客企業と準委任／請負関係ゆえ，当該案件の成否を判断する指標が売上と利益しかないためです．今後は，この結果から，デジタル人材育成のための効果的な取組みについて提案する予定です．

4.　多様な背景のメンバーからの刺激

筆者が在学する東京都立産業技術大学院大学は専門職大学院であり，「PBL（Project Based Learning）型教育」が特徴です．修士論文に代えて，2 年次の 1 年間で PBL を実施します．また，コロナ禍以降は，遠隔環境での学びが整備され，PBL も基本的に，ビデオ会議システムを使って行っています．

筆者が所属する PBL チームは，20 代から 40 代の幅広い世代のメンバー 6 名で構成されています．

全員が社会人で，陸運業，製造業，IT 企業などに所属しており，それぞれが多様な経験や知見を有しています．このようなメンバーと互いに学び合い，自分にはない視点や考え方など，良い刺激を受けることができています．

5.　おわりに

社会人大学院生として，研究を進めることは仕事との両立，家族との時間など，時間や体力面で，さまざまな制約があります．一方で，学んだ知識やスキルは，すぐ実務に活かすことができています．また，学んだ考え方やアプローチは必ず今後の人生で役立つと実感しています．

今後は社会人大学院生という立場を最大限活用しつつ，今回の受賞を励みに，キャリア構築や研究活動に取り組んで参ります．

今後とも引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます．

参考文献

IPA 独立行政法人情報処理推進機構，IT スキル標準 V3，2011 年．

IPA 独立行政法人情報処理推進機構，i コンピテンシーディクショナリ，2014 年．

IPA 独立行政法人情報処理推進機構，デジタルスキル標準 Ver. 1.2，2024 年．

山浦晴男『質的統合法入門―考え方と手順』医学書院，2012 年．

略歴

森口雅之（もりぐち　まさゆき）

2005 年 3 月に法政大学経済学部経済学科卒業後，複数の製造業において主に社内 SE として従事．2023 年 10 月より東京都立産業技術大学院大学産業技術研究科産業技術専攻情報アーキテクチャコース在学中．